

# 第一次世界大戦と言語危機

— ホーフマンスタール、カフカ、ヴィトゲンシュタインの事例から —

古 川 昌 文

## 0. はじめに

ホーフマンスタールの『チャンドス卿の手紙』が世に出たのは 1901 年のことである。言語の表現能力への懐疑を表明したこのエッセイ風作品は新しい 20 世紀文学の開始を告げるものとも言われ、実際、これ以降、言葉で表現することそれ自体を問い尋ねる作業が文学的営為の一つとなったと言ってもいいだろう。とはいえ、それは必ずしもホーフマンスタールの影響というわけではない。世紀転換期以降、現代に至るまで、私たちは自らの為すことを自己言及的に捉え返さざるを得ないという大きなパラダイムの中にいるのである。自然科学であれ、社会科学であれ、傍観者的・客観的な観察者がいわば神の視点に立って対象を観る／語るという素朴な構えは困難になった。観察すること、語ることは、再帰的・反省的に、「観察するとは？語るとは？」という問いへと問い返される。「観察」は「観察者－対象」関係の相互作用に巻き込まれ、「語り」は「語る者－対象」の相互作用に巻き込まれる。また、言葉は対象を表現する無色透明な媒体／道具ではなく、むしろ言葉が世界を分節し創り出す。であるならば、何ものかを言葉で表現するとはどういうことか、その可能性と限界とは — 表現する者がこのような問いを前に立ちつくすのはほとんど必然であっただろう。

他方、20 世紀は世界規模の大戦争、大量殺戮の時代である。言語で表現すること、しうることへの懐疑に直面した者たちが戦争という目の前の現実にとどのように向き合ったのか。言語への信頼のほころびと西洋世界の没落を予感させた戦争とはどのような関係にあったのか。この大きなテーマに単純な答えは出せないが、以下ではホーフマンスタール、カフカ、ヴィトゲンシュタインの三者について、彼らの思想・文学を基軸にして、第一次世界大戦との関係を限定的ながらも考えてみたい。

## 1. 外的事実の確認

ホーフマンスタール、カフカ、ヴィトゲンシュタインの共通点はオーストリア・ハンガリー二重帝国時代に生まれ育ち、帝国の瓦解に至る第一次世界大戦の時代を生きたとしたこと、そして何よりも「言語危機」あるいは「言語懐疑」と称される言語の限界への鋭敏な感覚を研ぎすまし、それをそれぞれの仕方で表現した人物だということ

とである。<sup>1</sup>この他、少しばかりの事実を確認しておこう。

ホーフマンスタールは 1874 年、カフカは 1883 年、ヴィトゲンシュタインは 1889 年生まれである。第一次大戦の勃発した 1914 年の時点では数えでそれぞれ 40 歳、31 歳、25 歳である。大づかみに時代を捉えるならほぼ同世代と括ることもできようが、歴史的な出来事に対するそれぞれの個人的体験を考える時にはこの年齢差は大きい。また、出身地をみると、ホーフマンスタールとヴィトゲンシュタインは二重帝国の中心地ウィーンだが、カフカはここに併合されていたチェコのプラハである。さらに、1914 年の時点で、40 歳のホーフマンスタールは既に名を成した詩人・作家であったのに対して、カフカは『判決』『変身』を書いてさほど間もない時期でまだ無名であり、ヴィトゲンシュタインは後に『論理哲学論考』の元になる原稿を書いているところだった。ホーフマンスタールが愛国者として戦争に協力したこと、ヴィトゲンシュタインが志願して従軍したこと、それに対してカフカが兵役を免れ戦争と直接関係しなかったことは、こうした年齢の違いや生誕・居住地の違いからある程度は説明できよう。しかしながら、以下では上のような事実を考慮に入れつつも、主として三者の言語に対する思想の相違に重点を置き、このことと戦争との関わり方に関連を見出すことを試みる。

## 2. ホーフマンスタールの言語懷疑

『チャンドス卿の手紙』<sup>2</sup>（以下『手紙』と略記）は「言語危機」の思潮を代表する作品とされる。架空の人物チャンドス卿がフランシス・ベーコンに宛てた手紙という設定である。チャンドス卿は書くことができなくなった自分の苦しみや精神状態を綿々と綴り、ついには今後の執筆を放棄することを表明して手紙を結ぶ。フィクションではあるものの、古典に通曉し、若くして数々の卓越した詩作品を発表して世を驚かせ、高い評価を得てきた人物として設定されるチャンドス卿の姿は、十代で才能を絶賛され早熟の天才と言われたホーフマンスタール自身の姿に重なる。また、『手紙』以降、ホーフマンスタールが詩作から徐々に離れていき、古典の改作やオペラの台本執筆へと向かったことから、この作品が多分に自伝的要素を持っていることが窺える。

では『手紙』に描かれたチャンドス卿の「書くことができない」という状況はどのようなものであったのか。若い頃から次々と傑作を物し高い評価を得てきたチャンドス卿はその優れた言語能力と博学を駆使して世界を全一的に捉えるべく大作の構想を温めていた。ところがある時期から次第に身の回りにある事物が、それまでは取るに

<sup>1</sup> 付け加えるならば三者ともユダヤ系であるが、本論ではこの点は考慮しない。

<sup>2</sup> 引用は次のテキストから行う。Hugo von Hofmannsthal, *Ein Brief*, In: *Sämtliche Werke, Kritische Ausgabe*, XXXI. S.Fischer.

足りないものであった事物の一つ一つが、それぞれ独自の相貌を纏って彼の前に立ち現れるようになり、彼はそれらを捉える言葉を失っていく。『手紙』の言葉を見てみよう。

一個のじょうろ、畑にうち捨てられた馬鍬、日向の犬、みずぼらしい墓地、ひとりの障碍者、小さな百姓家、こうしたものすべてが私の靈感の器となりえます。これらの事物や他の何千という似たものが、(中略)私にとって突然ある瞬間に、(中略)崇高な、心を打つある相貌を帯び、それを表現するにはいっさいの語が私にはあまりにも貧しく思われるのです。<sup>3</sup>

一つ一つの事物がいわく言いがたい相貌(Gepräge)とともに「私」の前に立ち上がり、それまで駆使してきた既存のあらゆる言葉を凌駕する。言葉は事物を調和の内に表現する力を失い、「腐った茸のように」(wie modrige Pilze)<sup>4</sup>ぼろぼろと崩れ落ちる。「私」は愛読する古典の言葉に救いを求める。

これらの概念、私はそれらをよく理解できました。それらのすばらしい関係の戯れが金色のボールと戯れる華麗な噴水のように私の前に立ち昇るのが見えました。私は概念たちの周りを漂い、それらが互いに戯れ合う様を眺めることができたのです。ところが、それらはただ相互に関係し合うだけで、私の思考の最も奥深くにあるもの、個人的なものは、その輪舞からずっと締め出されたままでした。それらの概念の中にいると、恐ろしい孤独感に襲われました。私はあたかも目のない彫像ばかりが立ち並ぶ庭に閉じ込められた者のような心持ちがして、再び戸外に逃れたのでした。<sup>5</sup>

古典の美しく彫琢された言葉たちはその美しい姿のまま、しかし「私」の奥深くにあるものとは疎遠に、華麗に舞い続ける。こうして外界の事物も、「私」の内面も、もはや言葉では表現できないものになっていく。チャンドス卿の語る「危機」はおおよそ以上のような様相を呈している。しかしこれだけではホーフマンスタールと戦争協力との関係は見えてこない。以下、カフカの言語観と引き比べながら戦争との関連を探ってみることにしよう。

### 3. ホーフマンスタールとカフカの類似性

---

<sup>3</sup> Ebd. S.50.

<sup>4</sup> Ebd. S.49.

<sup>5</sup> Ebd. S.50.

カフカは自己の内面世界を表現へとたたらそうとした作家である。このことは「夢のような内面生活の描写以外、何ものも私を満足させてはくれない」<sup>6</sup>と日記に書いていることから知れる。しかしカフカはこの「内面生活の描写」に何度も躓き、「書くことができない」と繰り返し嘆く。内なる世界を言語で表現することの困難についてカフカが書いていることは、ホーフマンスタール描くチャンドス卿の言葉と似ている。両者を並べてみよう。(1)はホーフマンスタール『手紙』の一部、(2)はカフカが友人マックス・ブロートに書いた手紙の一部である。

(1) 私はもはやそれらを物事を単純化する習慣のまなざしで捉えることができなくなりました。全てはばらばらになり、ばらばらになった部分はさらにばらばらになり、もはや単一の概念で包み込めるものは何一つなくなったのです。一つ一つの言葉は私の周りを浮遊し、凝縮し、目となって私を凝視し、私の方もその目の中を覗き込まなければならぬ有様です。その目は渦となり、中を覗くと眩暈がします。休みなく回り続け、巻き込まれると空虚に至る渦です。<sup>7</sup>

(2) 私は書くことができません。私は自分で良しと認められるものを一行たりとも書いたことはありません。(中略)私の身体全体が、私にあらゆる言葉に対して警戒するよう呼びかけます。どの言葉も、私によって書かれる前に、まず四方八方を見回します。書こうとした文は文字通りこなごなに碎けてしまいます。私には文の内部が見えているのですが、そうなったらすぐさま中止しなければなりません。<sup>8</sup>

いずれも言葉が「目」の比喻で捉えられる。ホーフマンスタールにあっては、その「目」は「私」を凝視し(anstarren)、渦となって「私」に眩暈を起こさせ(schwindeln)、「空虚」(die Leere)に至らしめる。カフカはもっとあっさりとした比喻で語り、「そうなったらすぐさま中止しなければならない」(ich...muß dann aber rasch aufhören.)と書く。いずれにせよ、言葉が「目」として身体化され、それが書く「私」の身体に作用し、書くことを妨げるのである。言葉は対象を叙述する道具ではなく、それ自体が生きてこの「私」に作用するものと観念されている。書くことは、対象を叙述する以前に、言葉という身体化した他者に妨害されるのである。

引用した二つの文にはおそらく影響関係がある。カフカの手紙の受取人であるブロートによると、カフカはホーフマンスタールのエッセイ『詩について』(1904年)を読み、強く感銘を受けたという。また、ホーフマンスタールは『小説と戯曲における性

<sup>6</sup> Franz Kafka, *Tagebücher 1912-14*. S. Fischer 1994. S.167

<sup>7</sup> Hoffmannsthal, a.a.O. S.49.

<sup>8</sup> Franz Kafka, *Briefe 1902-1924*, Hrsg. von Max Brod, S. Fischer 1975. S.85.

格について』(1902年)において「火夫」(der Heizer)という形象を芸術家の喩えとして用いているが、その10年後にカフカは文字通り『火夫』(Der Heizer, 1912年)というタイトルの短篇を書いている。カフカがホーフマンスタールの諸作品を読み、かつ影響を受けたことは間違いあるまい。ホーフマンスタールの『手紙』もまたカフカは当然読んでいたと思われる。

したがって、ホーフマンスタールとカフカは言語的表現の困難について同じような問題を抱えていたと考えていいだろう。少なくともカフカはホーフマンスタールの表現する「危機」を自分自身の問題として受け取った。だとすれば、二人の第一次大戦への距離の取り方が大きく違うことをどう考えたらいいたろうか。言葉の「危機」とは無関係に、両者の地理的、時間的、社会的立場の相違から来る経験の相違、すなわち外的な諸条件の違いにのみ帰せられるべきものなのか。それとも何らかの形で「危機」の内実が関与しているのか。ここでは、外的諸条件が大きく異なることの重要性は認めつつも、二人の「危機」への向き合い方、換言すれば言葉への向き合い方に同質性の中の異質性ともいうべきものを見て取り、それが戦争という外的現実への異なる態度と関係しているのではないかという仮説を提示してみたい。

#### 4. ホーフマンスタールとカフカの「危機」の相違

上述の通り、ホーフマンスタールとカフカは言語の「危機」という点で同種の問題を共有していた。しかしながら両者は全く同じではない。ホーフマンスタール描くチャンドス卿が「危機」から書くことの断念へと至ったのに対して、カフカはなおも書き続けた。両者の「危機」の様態には、少なからぬ相違があるのでないか。

森本浩一氏はホーフマンスタールの『手紙』について、「(前略)素朴に読む読者は、必ず何か騙されたような印象を受けるに違いない」と述べる。その理由は、語り手は「言葉、とりわけ文学的な『修辞』(Rhetorik)への嫌悪を表明している」にもかかわらず、「その表明の文章は、極めて修辞的に行き届いた美しい文体で書かれている」からである。<sup>9</sup>平たくいえば、言っていることとやっていることが違うというのである。確かに、「落書き禁止」という文字が「落書き」に他ならないという事態に似て、ホーフマンスタールが豊かな語彙と修辞を駆使して見事に描き出す「危機」は見方によっては「おまえが言うなよ」という反応を惹き起こしかねないにも思われる。このような華麗な修辞による「危機」の描き方を森本氏は言語の「主題化」と呼び、「前景化」と区別する。<sup>10</sup>前者は言語の「危機」に「ついて」語り、後者はそれをパフォーマンスに実践するというわけだ。

<sup>9</sup> 森本浩一：「比喩を読む—ホーフマンスタール、リルケ、カフカにおける「言語」の前景化の諸相、『ドイツ文学論集 小栗浩教授退官記念』(1984年)所収、684頁。

<sup>10</sup> 同書、689頁。

ホーフマンスタールに対するこのような仮借なき裁断は一面の真理を突いていると言わざるをえない。但し一面に過ぎない。<sup>11</sup>というのも、ホーフマンスタールのそうした筆致、すなわち、「もはや書くことができない」という苦悩を表現する時ですら筆を一切乱すことなく端正なスタイルを貫くこと、これが彼にとっては欠くべからざる重要な要件だったはずだからである。確かにある視点からは、森本氏の言うように、ホーフマンスタールは言語の危機を「主題化」したにすぎないと言えよう。だが別の視点からは、そのような書き方を通して彼は端正かつ伝統的な詩的スタイルを「前景化」したのである。彼はすでに 19 世紀末の諸作品で、文化・伝統が壊れていく現実世界から目を背けるように、内的世界へと沈潜する強い傾向を示している。それはオーストリアの危機、末期的状況を鋭敏に感じ取ったがゆえであり、同時に、連綿と受け継がれ蓄積されてきた伝統文化を自らの精神世界のうちに保持し再生しようとしたからであった。後者は外的現実には裏切られ続けるがゆえに内向していく。彼は常に、文化の滅びという外的現実への憂鬱な眼差しと文化の継承・再生という内的希求との狭間にあった。ホーフマンスタールがチャンドス卿に語らせる言語の危機とは、この外的現実における滅びの予感と不可分である。語られる「内容」は、たとえば『ティツィアーノの死』(1892年)や『痴人と死』(1893年)に見られるように死であり滅びであり退廃であるのに対して、語る「形式」は中世神秘劇、バロック劇などの伝統的文学形式を動員して高い詩的完成度を示す。題材もまた好んで歴史上の人物・出来事から採られる。『手紙』においても事情は同じであろう。語られている「内容」は言語の危機、つまり言葉で世界を表現することの不可能であるが、それを語る「形式」は高い修辭的完成度を誇る。そして手紙の名宛人としてフランシス・ベーコンという偉大な百科全書的哲人を 16 世紀から呼び出してくる。ホーフマンスタールは崩壊する言語という「内容」をこの上なく美しく均整のとれた「形式」で包むことによって、滅びゆく文化の継承・再生を試みた。『手紙』の重心は、「危機」を語ることに、危機を「語る」ことにあったと考えられるのである。

そうであるならば、第一次世界大戦という未曾有の犠牲者を出した戦争に際して彼が積極的に国家主義ともみえる保守的な立場を取ったのも当然だと思われる。戦争中、彼は愛国的な文章を次々と書き、政府からの委任により二重帝国を称揚し戦いを鼓舞する講演を国内外で行った。彼にとってこの帝国は西洋の伝統を受け継ぎさらに豊かなものとするひとときを優れた文化国家であった。クラウディオ・マグリスは大戦中のホーフマンスタールをこう描写する。「彼は、オーストリアのすべての階層の団結を呼びかけ、わけても上流階級に対して犠牲的精神を喚起し、道徳教化を目的として、平明な文体でオイゲン公の英雄行為の物語を出版し、また、マリア・テレジアの思い出

<sup>11</sup> 注 9 の引用で「素朴に読む読者は」と限定されていることから、森本氏も一面的であることは承知の上での所論であろう。

を美化し、カルパチア山脈における軍隊の奇蹟的成果を称賛した」<sup>12</sup>彼にとってこの戦争はオーストリア＝ハンガリー帝国の、ひいてはヨーロッパの伝統を守るために敗北を許されない戦いなのであった。

カフカの場合にはどうか。ウィーンのホーフマンスタールに比べればプラハのカフカが戦争との関わりが薄いのは当然だろう。仮に関わるとしても、二重帝国への協力ではなく、そこからの解放という方向を取っただろう。しかしカフカはいずれの方向にもさしたる関心を示した様子がない。この政治性の薄さは、自らのユダヤ性を強く意識していたにもかかわらず政治運動としてのシオニズムから距離を取り続けたところにも感じ取ることができる。様々な理由を考えることができるが、ここでは言葉との関係に絞ろう。

前節でも紹介したようにカフカは「夢のような内面生活の描写以外、何ものも私を満足させてはくれない」と書いている。「内面生活」(das innere Leben)<sup>13</sup>が「夢のよう」(traumhaft)と形容されていることに注意したい。これは通常の意味で外的生活に対する「内面」ではなく、日常はその存在を意識しないでいる次元、たとえば日常意識が消えた夢の中にかろうじてその一部が現れてくるような次元の「内面」であることを示唆している。それは言葉を駆使して表現する「対象」ではなく、否応なく言葉を紡いでしまう「主体」の側に潜んでいる何ものかである。「私の内面は～」と容易に語られる内面ではなく、そのように語ってしまう「私」が隠し持つ動因である。それはちょうど、自分の目で自分の目を見ることができないように、語る主体からは構造的に隠されている。

そのような「夢のような内面生活＝内なる生」を描出することがカフカの目的だったとすれば、その困難は想像に難くない。1917年、カフカは「言葉は、感覚世界に対応して、ただ所有とその連関を扱うだけだ」<sup>14</sup>というアフォリズム風の断片を書き残している。それゆえ「言葉は感覚世界以外のすべてに対してただ暗示的にしか用いることができない」と。1917年といえば、よく知られた『判決』や『変身』のような短・中篇も、さらに長篇『失踪者』と『訴訟』もすでに書いていた。つまり、カフカが自分なりの創作技法をほぼ獲得していた時期である。したがって、このアフォリズムには彼の言語観がはっきり現れているとみていいだろう。言うまでもなくカフカのいう「内面生活」は「感覚世界以外」にあたる(感覚される世界はすでに「対象」である)。言葉を「暗示的に」に用いることで「内面生活」を描写する——これだけではほとんど

<sup>12</sup> クラウディオ・マグリス (鈴木隆雄他訳)：オーストリアとハプスブルク神話、白馬書房(1990年)、328頁。

<sup>13</sup> 過度の抽象化を避けて「内面生活」としておくが、具体性に富む「生活」というよりも、断片化した「内なる生」といった意味合いが強いと思われる。

<sup>14</sup> Franz Kafka, *Beim Bau der chinesischen Mauer und andere Schriften aus dem Nachlaß*, S.Fischer 1994. S.237.

ど何も分からないが、ともあれこれがカフカの文学の方法である。これがどのような方法であるかについては6節に譲ることにして、カフカの戦争との関わりの無さについて簡単に私見を述べておこう。

上記のような意味での「内面生活」の描写以外に自分を満足させるものは何もないと書くカフカは戦争のような外的現実に関わっていくずっと以前の段階に逡巡していたという他はない。単に戦争が切迫した現実ではなかったというだけではない。先に述べたように、シオニズムに対してもそうであったし、もっと身近な事柄、たとえば結婚に対しても逡巡に逡巡を重ね、踏み切ることはついになかった。「私は何をなすべきか」と問うときすでに「私」という問題は乗り越えられている、という意味で言うなら、カフカは「私」という問題を、すなわち内面の問題を乗り越えてはいなかった。このことを筆者はネガティブに言っているのではない。ここには優れて現代的なアイデンティティの問題が露出しているのであり、その問題と愚直なまでに格闘したところにカフカのアクチュアリティがある。但し、これは本稿とは別のテーマで改めて述べるべきことであろう。

以上のように、ホーフマンスタールが言語の「危機」に直面して文化伝統の生産的継承を目指したのに対して、カフカにはホーフマンスタールにとってのオーストリアあるいは西洋に相当するものがなかった。あえて言えばユダヤの伝統だろうか。しかしカフカはこれを貪欲に学びながらも常に逡巡するかのような距離も置いていた。言語の「危機」に対する二人の相違は、新しいものを取り込みつつ古典的完成を目指すホーフマンスタールと「まだ、無い」ものを創り出そうとするカフカとのスタイルの違いとして現れることとなった。

## 5. ヴィトゲンシュタインと第一次世界大戦

第一次大戦が始まって間もない1914年の夏、ヴィトゲンシュタインは志願兵としてオーストリア＝ハンガリー帝国軍に加わった。対ロシア戦やイタリア戦線では前線で戦い、その戦功により勲章も授けられている。戦争に対するこの積極的な姿勢は、少なくとも外面的には、非政治的なカフカよりも愛国者として戦争に関わったホーフマンスタールに近い。しかしながら彼は従軍中に、後に『論理哲学論考』（以下『論考』と略記）に結実する哲学的思考を重ね、原稿も書き進めていた。敗戦後、イタリア軍に捕えられ捕虜となっても収容所からバートランド・ラッセルに宛てて哲学的思索の成果を知らせる手紙を書き送っている。常に生きるか死ぬかの瀬戸際にあったわけではないにせよ、戦場であってこのような思索にいそしむことができたことに驚きを禁じえない。彼には自殺の衝動が繰り返し襲ってきたことが知られており、戦争に志願したのは自らの死に場所を求めた一種の自殺行為であったという同僚（小学校教

師)の証言もあるようだが<sup>15</sup>、それだけでは捨て身の勇敢な戦闘行為の理由にはなっても戦場で厳密な哲学的思索を継続しえたことの原因にはなるまい。ヴィトゲンシュタインは戦争に自ら参加する一方で、その戦争にどこか無関心であるようにみえる。このような彼の戦争に対する独特な距離感を考えると、ホーフマンスタールの愛国とは別種の何かを感じないではいられない。ここには彼の思想が何らかの形で関係しているのではないか。

前期ヴィトゲンシュタインの大きな関心の一つは「語りうること」と「語りえないこと」の間に境界線を引くことだった言えるだろう。『論考』の全体は「語りうること」をできる限り明確にすることに向けられている。それは同時に「語りえないこと」との境界線を内側から引くことでもあった。彼は「論理空間における事実の総体」(1.13)<sup>16</sup>を「世界」とし、「語りうること」の範囲を厳密に規定しようとした。真偽の判定ができない命題はナンセンスなのであり、それゆえ従来の形而上哲学も間違いではなく単にナンセンスである。神も倫理も「この私」という主体も、この世界の中にはないがゆえに「語りえない」領域とされる。もちろんヴィトゲンシュタインはこれらの領域を「語りえない」ものとすることによって葬り去ろうとしたのではない。「それ(=哲学)は語りうるものを明晰に表現することによって語りえないものを指し示す」(4.115)、つまり彼の行う哲学は「語りえないものを指し示す」(das Unsagbare bedeuten)ものでもあった。とりわけここでは「私=主体」についての記述に注目しておきたい。

『論考』は「私とは私の世界である」(5.63)と端的に述べる。ところが一方で「思考し表象する主体は存在しない」(5.631)とも言う。なぜなら、「主体は世界に属さない。それは世界の限界である」(5.632)からだ。「私=主体」とはこの世界(=私の世界)の限界をなし、世界の内部には存在しない。当然、そのような非在の「私」は言葉による表現の対象にはなりえない。こうして次のような独特の独我論理解が述べられる。「独我論の言わんとすること、それは全く正しい、ただ、それは語ることはできず、自ずと現れ出る」(5.62)。「私」が世界を、経験を語ることに、それが「私の」世界であり経験であるというそのことにおいて、すべては「私の世界」であるという事態が自ずと現出する(sich zeigen)。この「私」という限界の外に出ることはできない。それゆえ「私」を示す(zeigen)こともできない。このような思考は、カフカが断片的に語る思考と重なっているように思われるが、これについては後述することにしよう。

ヴィトゲンシュタインは文芸誌『ブレンナー』の編集者ルートヴィヒ・フォン・フ

<sup>15</sup> 黒崎宏：ウィトゲンシュタインの生涯と哲学、勁草書房(1980年)、50頁。

<sup>16</sup> テキストは以下を使用した(引用箇所は命題番号で示す)。Ludwig Wittgenstein: *Tractatus logico-philosophicus*, Werkausgabe Bd.1, suhrkamp taschenbuch, 1993.

フィッカーへの手紙に「この本の意義は倫理的なものである」と書いている。<sup>17</sup>しかし先に述べたように、『論考』は倫理が語りえない領域にあることも示している。ここで語りえないというのは、個々の倫理的な文言のことではなく、倫理の根拠、言い換えると、善悪の根拠である。事実として倫理的な言葉は世に溢れ、様々に語られている。しかし倫理の根拠、正しさは真偽の判定ができない。倫理が倫理として意味を持つ根拠はといえば、「そのように語られ、それに従って行為がなされている」というところにしかない。倫理もまた、これを対象化して語ることはできず、ただ行為のうちに示されるのみである。このことは彼が『哲学探究』(*Philosophische Untersuchungen*)で「語の意味とは言語におけるその使用である」(43節)と述べることと同じ理路にある。「使用」(*Gebrauch*)とは何らかの必然的な根拠を持つものではなく、言うなれば「慣習」(*Brauch*)である。

こうした思考の内であったヴィトゲンシュタインが肯定であれ否定であれ決然たる善悪判断に基づいて戦争に関わったとしたなら、むしろその方が驚きである。むしろそうではなかったはずだ。推測の域を出ないが、彼はいわば時代の「慣習」に従って従軍したのではなかったか。そこに積極性があったとすれば、傍からみると不自然なほどに自ら進んで「慣習」に、「行為」に、参与しようとしたところにあるのではないか。庭師の仕事然り、小学校教師然り。とりわけ小学校教師は何も知らぬ子供に何かを教えるという点で、他者との間に「意味」がいかんにして共有されるかを確認する好個の実験場であった(良き教師とは言えなかったようだが)。彼は大学の研究室ではなく、人々が慣習的に行っている行為の場を哲学の思考の場にしようとしたようにも思われる。

『論考』には「語りえないものについては沈黙しなければならない」(7)という有名な最終命題の直前に次の命題が置かれている。「私の命題群は以下のような経過を辿って解明を行う。すなわち、私を理解する人が私の命題群をくぐり抜け、上に立ち、乗り越え、ついにはそれらが無意味であることを知る、そういう経過を辿って。(中略)この時、読者は世界を正しく見るのだ。」(6.54)。語りうることの論理的限界は語り終えた、ここから先は具体的に、個別に、正しく世界を見ること、そういう自信に満ちた宣言である。<sup>18</sup>と同時に、ここまでの命題群を指して「無意味」(*unsinnig*)と呼ぶのは、それらが、語り、行為する普通の生活の上では不要のことだからである。しかし、もちろん、ヴィトゲンシュタインにとっては不要どころか必要不可欠な探求だった。おそらく彼は生きていくために必要な「普通」に達していないことを経験的に知っていた。だとすれば彼にとってこうした探求は普通の人々より高い所に立つことではな

<sup>17</sup> 黒崎宏、前掲書、124頁。黒崎氏はこれをヴィトゲンシュタインが出版者フィッカーに売り込むための方便だった可能性もあることを指摘している(同書132頁)。

<sup>18</sup> 後に『論考』をヴィトゲンシュタイン自身が否定することになるのだが、本論では触れない。

い。むしろ、それを通して彼は「普通」という「慣習」の地盤に近づいたのである。この意味でも彼は「慣習」にあえて参与しようとした。戦争も例外ではない。目前の戦争の歴史的あるいは社会的意義などは問題ではない。自国が戦いを始めれば、そこに参加して共に戦う。この「普通」へと自らを駆り立てること、それは彼が生きていくためにどうしても必要なことだった。「世界を正しく見る」とはおそらく「普通に生きる」の言い換えなのである。傍からは過剰な「普通」に見えたとしても。

## 6. カフカとヴィトゲンシュタインの類似性

言葉を暗示的に用いることで内面生活を描写すること、これがカフカの方法だと先ほど言った。これは前節のヴィトゲンシュタインの思想と以下のような意味で内的に近接しているように思われる。

ヴィトゲンシュタインにとって「私＝主体」は語りえないものであった。ただ、「世界」とは「私の世界」であるがゆえに、世界を語るそのことの内に独我論的構造が自ずと示される。カフカもまた、思考の経過は違っても、同じような意味で「私」が自ずと現れ出ることを試みたのではないか。それは「私」を「対象」として描くのではなく、「私」の行為及び「私」の感覚が捉えるものをできるだけ直接的に（反省を交えないで）叙述することである。比喩的にいえば、「目」を対象化することなく、「目」が捉えるものを極力直接的に叙述することを通して、「目」がいかなるものであるかが自ずと示されるような書き方を模索した。内面世界すなわち「私」を描くにあたって言葉を「暗示的に」(andeutungsweise)用いるとはこのことを指しているのではないか。ここに筆者はカフカとヴィトゲンシュタインの近接性を見る。

もちろん、そのような書き方は容易ではない。なぜなら、認識には知が介在する、そしてその時「私」は知らぬ間に対象化されるからだ。「私は～と思った」という叙述には、それが自己認識である限り、すでに「私」の内面が反省的に捉え返され「対象」化されている。カフカにとってそのように対象化された「私」は嘘なのである。では本当の「私」とは何か。それは認識対象ではないがゆえに不可知である。カフカはその時々浮かび来るイメージを書きながら、あるいは書いた後に、そこに「私」が現れ出ているかどうかを知ではなく感触によって知るのである。彼が何らプロットを練ることなくいきなり書き始めたのはそのためである。<sup>19</sup>また、「内面生活」と言いながら、作品には登場人物のいわゆる「心理描写」が極めて少ないのもそのためである。カフカのいう「内面」は心理学の対象となる水準とは異なっていた。カフカは心理学

---

<sup>19</sup> カフカ批判版全集の編集者 M.ペイズリーはカフカの原稿を精査した上で、カフカが書く際に自らに課したと思われる3つの要件を挙げる。自然発生的であること、中断なく一気に書くこと、前もって計画することなく全てに開かれた状態にあること。Vgl. Malcom Pasley, *Der Schreibakt und das Geschriebene. Zur Frage der Entstehung von Kafkas Texten*. In: *Franz Kafka. Themen und Probleme*. Hrsg. von Claude David. Göttingen 1980. S.18.

を「鏡に映った文字を読むようなもの」<sup>20</sup>とネガティブに評価する。「鏡」は自己を対象化することの比喩であろう。ヴィトゲンシュタインもまた『論考』に「哲学でいう自己は（中略）心理学が扱うような人間の心ではない」（5.641）と書いている。カフカが描出を試みる自己とヴィトゲンシュタインの言う「哲学的自己」とは同じではないが、ここにも発想の近似を窺うことができよう。

ヴィトゲンシュタインの哲学が前節で述べたように「普通」という岩盤に辿り着くための探求だったとすれば、カフカは結婚し家族を持つという「普通」の手前で逡巡し、その前提となる「私」の把握に苦闘した。両者の「普通」もまた同じものではないが、それぞれの「普通」に向けて両者は自己治療を試みたのだといえる。第一次大戦に際して、一方はすぐさま志願して従軍し、他方はさしたる関わりを持たなかったが、この表層における極端な対照とは裏腹に、二人には内的な親近性がはっきりと見て取れるのである。

## 7. 結語

以上見てきたように、ホーフマンスタール、カフカ、ヴィトゲンシュタインは言語危機という時代思潮の中で語るができるが、それぞれの思想には類似性ととも大きな違いが認められる。ここに第一次世界大戦との関係を重ね合わせてみると、三者の類似と相違はさらに錯綜してくる。だが同時に、表現された思想のみに焦点を合わせていた時には見えなかったものも見えてくる。

文学表現における言語の無力について語る言葉を見ると、ホーフマンスタールとカフカは類似している。二人の間には影響関係も認められる。しかし、戦争との関わり方の相違を梃子にして二人の文学や思想を見直すと、大きな違いにも気づかざるをえない。ホーフマンスタールの「言語危機」はオーストリア文化ひいてはヨーロッパ文化の伝統の危機と重ね合わされて主題化されている。そして「危機」を素材とし、持てる文学形式を駆使して、「伝統」的な語りを遂行する。そこには、継承され蓄積されてきた、しかし今や滅びゆくかに思われる「伝統」を身を挺して保守し、あるいはより豊かさを加えて再生産し、後世に手渡したいという強い願いが感じられる。一方、カフカにとって言語の「危機」は語りの対象でも主題でもない。「私」を描こうとするときに常につきまとう桎梏である。「感覚世界に対応して、ただ所有とその連関を扱うだけ」の言語を、身を振るように、その言語で語る当の「私」の現出へと振り向けようとした。カフカにとって、そうして書いたもののほとんどは失敗だった。毎夜、机について苦闘するカフカには、たとえ戦争がもっと身近な出来事だったとしても、積極的に関わることはできなかったかどうかは疑わしい。

---

<sup>20</sup>Kafka, *Beim Bau der chinesischen Mauer*, a.a.O. S.216.

戦争への積極的な関わりという点ではヴィトゲンシュタインの方がホーフマンスタールにずっと近い。片や兵士として前線で戦い、片や文学者として戦意高揚の役割を演じた。しかし一見似てみえる戦争への積極的な関与にも、よく見るとその性格には大きな違いがある。ホーフマンスタールの戦争協力には愛国者・文化的保守主義者としての側面が顕著に見えるが、ヴィトゲンシュタインの関わり方はそれに比べてずっと個人的である。勲章を与えられるほど勇敢に戦いながら、勝利にも敗北にも大きな動揺を見せる風もなく（ロシア戦線の激しい戦闘ではかなりの精神的ショックを受けたようだが）、哲学する時間が足りないことを嘆いたりしている。戦争に対するこの、近いのか遠いのか判別しがたい不思議な距離感には、彼の非歴史的・非因果論的な思考様態が強く関わっていると思われる。歴史的因果の産物である戦争は彼の思考とは相容れず、同時に、目の前の戦争は彼にとって願ってもない「普通」への、つまりは「生」への梯子だった。この「普通」という岩盤へと自己治療する生への意思こそが彼の思考の動機の供給源であり、その意味では、彼は従軍中にもかかわらず哲学をしたというより、従軍中だからこそ哲学に集中したのである。この生への意思は、裏返せば、死の衝動との戦いでもあっただろう。戦争という抜き差しならぬ「行為」の場へ自らを投げ込むことは、いわば「生きる」ためのスキルだった。

そしてヴィトゲンシュタインとカフカ。哲学者として厳密な思考を遂行するヴィトゲンシュタインと、いわばイメージで思考する作家カフカとでは、大きな違いがあるのは当然だ。戦争との関わり方もまったく違う。しかし、見てきた通り、表に現れる形は違っても、その発想の仕方において、二人はかなり近接した位置にある（二人の間に影響関係はない）。カフカにとって「外的世界は観察できるが内的世界は観察できない」。<sup>21</sup>これをヴィトゲンシュタイン流に内的世界は「世界の中には存在しない」と表現するなら、それは、対象として示す(zeigen)ことはできず、語るという行為の内に自ら現れ出る(sich zeigen)のである。この二人の類似を見るとき、あの大戦争に関わったかどうかは表層の些細な違いに思えてくる。「おまえと世界との戦いでは世界の側につけ」<sup>22</sup>と書くカフカはいわゆる「私の内面」がいかほどのものでもないことを知悉していた。違うのは、ヴィトゲンシュタインが「私」という虚点を外的な「行為」へ投入したのに対して、カフカはそれを「書く」という「行為」へ投入したという点である。それはいずれも当の「行為」の中に「私」を現出させること、すなわち「生きる」ということに他ならなかった。

言語危機と第一次世界大戦とはひとまず別のことである。しかしシュペングラー以降知識人の間で盛んに口にされるようになった「西洋の没落」<sup>23</sup>はいわば時代の気分

<sup>21</sup> Kafka, *Beim Bau der chinesischen Mauer*, a.a.O. S.162.

<sup>22</sup> Ebd. S.236.

<sup>23</sup> シュペングラー(Oswald Spengler)の『西洋の没落』(*Der Untergang des Abendlandes*)第一巻が

としてすでに世紀末から始まっていた。19世紀的秩序を乗り越えようとする世紀末以後の様々な——しばしば伝統破壊を伴う——文化的現象・運動は破壊に破壊を重ねヨーロッパ全体を疲弊させて終結したあの大戦争と確実に通底しているであろう。言語危機も、この大きなうねりの中にあって、ホーフマンスタールの歴史意識やヴィトゲンシュタイン、カフカの個人意識を包含しながら、分岐・輻輳を繰り返し現代に続いているのである。